生活史的視点からのランドスケープ研究

Landscape Studies based on the Analysis of Life History

若生 謙二* Kenji WAKO

1. はじめに

ランドスケープ研究は領域の拡大にともない、さまざまな視点からのアプローチが必要とされるようになってきている。ランドスケープ研究の主要な対象の一つである公園の研究では、近年の新しい傾向として生活史的視点からの研究が始められている。それは明治以来120年をこえる年月の間に、市民との関係をもちながら社会に定着してきた公園の歴史性を評価し、都市における生活文化としての公園の姿を明らかにしようとするものである。その研究的蓄積は、市民のための公園づくりの計画と管理につながるものであるが、生活史という言葉の意味のつかみにくさのために、生活史的視点からの公園研究の意義と方法は、まだ十分に理解されるに至っていないというのが実情であろう。そのため、ここでは生活史の意味と生活研究のはじまりである考現学の位置づけをふまえて、生活史的視点からの公園研究の方法の枠組みと具体的な研究の展開について述べることにしたい。

2. 方法の枠組み

生活史研究においては、生活史という言葉は日本語の一般的な意味での生活の歴史と個人の生活史という2つの意味で使われている。そのため生活史研究ではこれらの2つの側面からの研究が行われている¹⁾。現代に連なる生活研究は今和次郎の考現学にさかのぼることができるが、彼の考現学は現代に営まれている生活事象の直接観察とそれらの総体観察の視点に特徴がある。彼はしばしば公園を対象としてとりあげ、「各公園散策者男女の組の具合」「井の頭公園春のピクニック」「井の頭公園自殺場所分布図」²⁾などの調査を行っている。

考現学は生活研究の原型をなすものであるため、生活史的視点からの公園研究を考える際には、考現学とその周辺分野の関係を目を向けることが適切であろう。梅棹は考現学の方法を既存の他領域との関係から明解に位置づけている³⁾。民族学が未開社会を冷静に客観的に観察し記述する

ように、考現学は文明社会を客観的に観察し記述する。その意味で民族学は未開社会の考現学であり、考現学は文明社会の民族学である。また、民族学に近い民俗学は、過去の風俗を現在の残存事象を材料にして研究するものであるため、現在の事象のなかでもまさに消滅しようとする事象に特に注意があつまる。それに対し考現学は現在の風俗を研究するため、過去からの残存事象をふくめて現在みられる事象のすべてを材料とする。その意味で民俗学は歴史風俗学であり、考現学は現代風俗学であると述べている。

さらに梅棹³⁾は、生活事象の研究に資料として採用できるものに文書、談話、観察された事実の3つの種類があり、通常、歴史学では文書だけが信頼できる材料として使われるが、民俗学では文字に書かれたことのない常民の歴史を口述の資料にもとづいて再構成することが特徴であると述べている。それに対して考現学は現代を対象とするため、直接観察の事実が中心となり、今日の生態学に近いものであることを指摘している。生活史的視点からの公園研究では、これら3つのすべての資料を用いる方法が可能である。

以上のことから生活史的視点からの公園研究をとらえると、それは次の3つに大別される。

第1点は、公園自体の歴史を生活史的視点からとらえることであり、ここには公園と人間生活の関係の歴史という側面と公園自身の生活史という2つの側面がある。公園と人間生活の関係をむすぶものは利用であるが、公園は利用の変遷によって計画や管理に影響が及び公園の形態にも変容が生じる。これらの媒介となるのが公園についての見方や考え方としての公園観である。したがって、生活史的視点からの公園史研究では、利用の姿と人々の公園観に注目して公園史をとらえることに重点がおかれる。さらに公園自身の生活史という点では、これらの歴史からステージや様式をとらえることが課題となる。ここでは公園の利用や公園に対する意見について書かれた新聞などの文書が有力な資料になり、口述の資料も用いられる。

第2点は、人間生活の場としての公園の姿を明らかにす

*大阪芸術大学芸術学部

る公園利用の生活学的研究である。これは直接観察や総体観察など考現学的な手法によって行われるものであり、行動観察が主な対象になる。利用行動を再構成するためには、公園における生活誌（モノグラフ）の作成も有効な方法である。ある意図にもとづいて造成された公園での利用行動は限定されたものであり、公園利用の潜在的な行動を抽出するためには、野外空間一般での行動も対象とされる。

第3点は、個人の生活史における公園利用の記憶にもとづく利用行動と公園観の分析である。公園観は公園の利用とその認識によって形成されるため、人々の思い出の中にある公園像の集積に注目する必要がある。それには、できるだけ多くの公園利用の記憶を収集することが必要である。したがって、これには文字の記録や直接観察の記録とともに、口述の資料にもとづいて生活の中での公園利用の様子を再構成することが必要とされ、手紙、日記、自伝なども有効な資料となりうる。これには特定の公園を対象としてそれに対する人々の利用行動や公園観を分析するものと、公園を利用する生活の全般を対象とするものに分けることができる。

3. 研究の展開

公園生活史の研究は、以下のように進められている。生活史的視点からの公園史研究には、進士ら⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾の一連の研究がみられる。進士らは横浜公園と日比谷公園の生活史年表を作成し、これらの公園では単なる緑の都市施設、花や噴水の美しい空間といったイメージをこえた、外交、戦争などの人間史的・時代史的出来事を反映する生活史的側面が見い出される⁴⁾とし、破壊期に向かいつつあるようにとらえられる公園にかつては「市民利用充実期」があったことを指摘している⁶⁾。また、震災復興公園を生活史的視点からとりあげてその全体像を明らかにした上で、開園後数

年で不良とルンペンの巣となった公園の生活史を明らかにしている⁷⁾。

公園利用の生活学的研究には、進士・鈴木らの日比谷公園の総合的研究⁸⁾や長山⁹⁾の研究がみられる。進士らは24時間の利用実態調査を行い、日比谷公園では21時をピークとする夜間のアベック利用が特徴的であることを示している。これまでの公園利用調査では昼間の利用に対象が限定されていたが、24時間調査により利用者行動の全体像が明らかにされ、公園利用についての視点が広げられた。さらに公園内の利用者の行動追跡から利用行動の分類と行動量の集計を行い、利用者行動と単位空間の総合的分析を行っている。また、公園内浮浪者の生態と分布を明らかにしているが、公園におけるこれらの逸脱行為を評価することは、公園生活史研究の課題である。長山⁹⁾は羽根木プレイパークにおける利用者の分布調査と追跡調査などの行動調査を行い、その利用実態を明らかにしている。ニューヨークのセントラルパークの復元の報告¹⁰⁾では、公園の生活史とともに公園利用者の生活学的な調査が行われており、行動調査をもとにした公園の生活誌の記述による利用行動の再構成がなされている。

個人の生活史における公園利用の記憶に基づく公園生活史の研究には若生¹¹⁾の個人史と公園のとりくみがある。また、木下¹²⁾は子ども、父母、老人の3世代にわたる遊び場の体験についての聞き取り調査を行い、鳥瞰的、猫瞰的、虫瞰的という3つのスケールからその変化を分析している。

本文では公園を対象とした生活史的視点からの研究について述べたが、都市と市民にとっての歴史を評価してまちづくりの中に生かそうとするこれらの視点と方法は、地域計画や都市計画など広くランドスケープ全体の研究に応用することができるものである。

主要文献

- 1) 有末 賢 (1984): 生活研究とライフ・ヒストリー: 川添 登編, 生活学へのアプローチ, 49-52, ドメス出版
- 2) 今和次郎・吉田謙吉編著 (1930): モデルノロジオ・考現学, 春陽堂, 考現学今和次郎集第1巻所収, 277-284, 291-301 (1971), ドメス出版
- 3) 梅棹忠夫 (1971): 考現学と世相史 (上) - 現代史研究への人類学的アプローチ: 季刊人類学第2巻1号, 87-119, 社会思想社
- 4) 進士五十八・増田茂樹 (1982): 公園生活史の研究 (一), 横浜公園にみる生活史的考察: 生活学会報 9(1), 24-26
- 5) 進士五十八 (1982): 公園生活史の研究 (二), 日比谷公園にみる生活史的考察: 生活学会報 9(4), 19-25
- 6) 進士五十八 (1983): 公園生活史の研究 (三), 比較公園による生活史的考察: 生活学会報 10(3), 37-41
- 7) 進士五十八・吉田恵子 (1989): 震災復興公園の生活史的研 究: 造園雑誌 52(3), 155-165
- 8) 進士五十八・鈴木 誠他 (1983): 日比谷公園の総合的研究 (1-8) 日本建築学会関東支部研究報告集 145-176
- 9) 長山宗美 (1991): 冒険遊び場 (羽根木プレイパーク) の行動調査からみた利用実態について: 造園雑誌 54(5), 347-352
- 10) Elizabeth Barlow Rogers (1987): Rebuilding Central Park - A Management and Restoration Plan: The MIT Press 訳) 亀山 章・監修/若生謙二・訳 (1994): よみがえるセントラルパーク, ソフトサイエンス社
- 11) 若生謙二 (1994): 生活史的視点からの公園研究 - 個人史と公園 - について: 日本造園学会関西支部大会発表要旨, 11-12
- 12) 木下 勇 (1986): 三軒茶屋周辺における子どもの遊び場 - その三世代の変遷: 中鉢正美編著, 生活学の方法, 114-134, ドメス出版